

平成 21 年 6 月 15 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2007 - 2008 年度

課題番号：19820017

研究課題名（和文） 境界領域における異国船への対応と幕府対外政策

研究課題名（英文） Correspondence and shogunate foreign policy to foreign country ship in boundary region

研究代表者

松尾 晋一（MATSUO SHINICHI）

長崎県立大学・国際情報学部・講師

研究者番号 40453237

研究成果の概要：

18 世紀末から 19 世紀初頭における新たな異国船問題が、日本の境界領域にどのような影響を与え、いかなる状況にあったのか、この点を幕府対外政策との絡みで政治史の立場から検証し、導き出された成果を踏まえて、近世日本の国家的枠組の変化を捉え直した。その結果、文化期のロシア問題が、時間差はあるものの各立場の異国船認識あるいは戦略に変化をもたらしたことが明らかとなり、全国的に均質な境界認識と積極的な国家防衛観がこの時期に形成されつつあったことを解明した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,320,000	0	1,320,000
2008年度	1,310,000	393,000	1,703,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,630,000	393,000	3,023,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：日本史、ロシア、長崎、警備、境界領域、大名、異国船、幕府

1. 研究開始当初の背景

(1) 近世後期対外政策の再検

江戸時代の国際交流は、所謂「四つの口」に集約される。これはある意味、強固な中

央集権専制支配の実現を意味していると考えられるが、幕府が異国・異域との交流の窓口を「四つの口」に集約できたひとつの理由に、日本の周辺海域が比較的安定し

た環境にあったという条件があろう。しかし、18世紀末以降、アジア情勢が大きく変容したことで、日本の周辺地域の安定は崩れ、その影響に幕府は警戒した。そして幕府は、従来の政策的基調を保持する一方、新たな判断に基づく政策の転換に取り組んだ。ただこの状況は、単に幕府或いは「四つの口」の管理者だけではなく、「四つの口」それぞれを支えた境界領域、或いは海に面した地域を治めた領主（境界権力）にも警戒感を意識させた。これは、既存の国家の枠組みが揺さぶりをかけられたことを意味するが、この状況を理解する上で重要な境界領域の実状理解が、これまでの研究では見落とされてきた。この時期の境界権力の対応、そして境界領域の情勢と幕府の対外政策との関連を解明し、境界領域社会と国家権力の関係性を把握しなければ、新たな時代を迎えたアジア情勢への幕府の対応を国家的枠組みで捉えきれたとは言えない。

(2)境界領域と異国船問題

ロシア問題を要因に幕府の対外政策が見直されたことは知られているが、幕府は当初ロシア側に長崎での交渉を求めた。これは幕府が異国との交渉場を長崎に限定していたからであるが、この時点から長崎を中心とした地域社会（境界領域）は異国船問題を抱えた。そしてその後レザノフの来航を経て、フェートン号事件が起こり、長崎警備の再構築が本格的に行われた。この期間には、寛政期以降の日本を取り巻く情勢の変化に段階的に本腰を入れる、即ち旧来の認識や社会システムを活用した幕府の対応が見られるのだが、これまでの研究は、個別事例と個別対応の分析に終止している感がある。実際には境界領域全体

に影響があったことが予想され、事例分析を集成して面的な理解をしなければ、旧来の国家的枠組みの中にあった境界領域の秩序やシステムの展開を理解することはできない。

2. 研究の目的

18世紀末から19世紀初頭における新たな異国船問題が、日本の境界領域（ここでは、長崎を軍役で支えた大名で構成された地域ネットワークの範囲）にどのような影響を与え、いかなる状況にあったのか、この点を幕府対外政策との絡みで政治史の立場から検証する。そして、ここで導き出された成果を踏まえて、近世日本の国家的枠組の変化を捉え直すことが本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究の目的を検証するにあたり、三つの課題を設定した。(1)ロシア問題に関して境界権力が行った諜報活動の実態把握、(2)境界権力によるロシア対策の展開、(3)フェートン号事件の再検討を行い、(1)～(3)を踏まえて、異国船問題に対する境界領域の対応と幕府対外政策の関連について検討する。それらの内容については、以下の通りである。

(1)ロシア問題に関して境界権力が行った諜報活動の実態把握

これまでの研究成果から、レザノフ来航時に長崎奉行のロシア船取り扱いに関する認識に違いがあったこと、或いは長崎警備を担っていた大名がロシアの情報、或いは幕府・長崎奉行の動向を探る諜報活動に力を入れていたことが解明されつつある。これにより境界領域でロシア問題を重要視していた事実を確認できるが、事例が集成されないと、境界領域全体への影響度、或いは地理的条件を前提とした問題に対

する関心度の違いなどが理解できない。従って、従来研究対象とされてきた大名家の動向を再検討する他、松平家（島原）・五島家・松浦家・細川家などの謀報活動の実態を解明して、境界領域全体におけるロシア問題への関心度を検証する。

(2)境界権力によるロシア対策の展開

長崎警備を隔年で担っていた鍋島家は独自のロシア船来航時の対応策を作成し、急時に備えたが、領海を持つ大名も地理的条件を踏まえて、ロシア船来航への警戒から独自の対応策を検討していたことが予想され、個別の展開を見せたものと想定される。ここでは領内にロシア船の航路のある五島家と宗家（対馬）と松浦家に注目する。これらは、近世を通じて異国船警備などで貿易都市長崎を下支えし、領国が島であることから独自の体制で他世界への警戒をし続けた境界権力である。従って島嶼世界特有の政治活動が解明できると考えている。ただ、個別領域で出された対応策の集積、そこから導き出された傾向と幕府対外政策との関連まで分析しなければ、ロシア問題が境界領域に与えた本来的な影響などは推し量れないと考えるので、この点を考慮しながら研究を進めていく。

(3)フェートン号事件の再検討

オランダの国旗を掲げて長崎港に入港したフェートン号（イギリス船）への警備で、鍋島家が失態を演じ、長崎警備そのものが見直された。これは単に長崎奉行・鍋島家だけの問題ではなく、境界領域にとって異国船問題が再検されるきっかけになったことが想定される。従って、当時、もっとも警戒していたロシア船への対策を踏まえて、各大名家に残るフェートン号事件関連資料を分析し、

境界領域におけるフェートン号事件の意義を検証していく。

(4)異国船問題に対する境界領域の対応と幕府対外政策の関連

(1)～(4)の作業で解明されたことを踏まえた上で、本研究で対象とする地域以外の境界領域や境界権力に関する分析の前提となる先行研究の整理を行い、研究成果の到達点を確認する。そして、国家の枠組みのなかで境界領域の動向が果たした役割を多角的に分析する作業を行う。具体的には他の境界領域の動向との対比を行い、共通項と相違する部分を抽出し、当該期の日本における境界の特質を提示する。

4. 研究成果

(1)については、1780 - 1810年代のロシア問題が同時代的に長崎と蝦夷の間で情報交換されていたのか検討した。両地ともに情報収集活動は行っているものの、公式レベルの入手情報量が少なかったためか、両地を行き来する商人からも情報入手する動きがみられたことが明らかになってきた。

(2)については、佐賀藩のロシア船対策を検討したが、ロシア船への警戒感が強く、従来の体制を改める議論が活発に藩内で行われたが、文化期においては体制の改変までに至らなかったことが明らかになった。離島に領地を持つ大名の防衛体制が寛政から文化期にかけて変更されたが、共通点として階層を度外視した島民動員の警備体制が構築されたことが明らかとなった。

(3)については、蝦夷地へのロシア船来航が緊迫するなか、船頭レベルから意見聴取す

るなどして長崎警備の根本的な見直しが検討されていた。そのさなかにフェートン号が来航し、結果、船頭が提案した方策を軸に長崎奉行が大家と折衝し、新たな長崎警備体制を構築させようとしていたことを解明した。フェートン号事件の経験から長崎奉行の防衛観が変わり、幕府権力の懐に入れて異国船に対処する方法から、領域に接近させない積極的な防衛に転換したことを解明した。

(4)については、長崎奉行主導で改善策を模索し、老中の了解を得ながら、課題に取り組んだことが解明された。既存の体制を現実的な危機に合うように幕府は変更しようとするが、幕藩制の壁にぶつかり大家側の要求に妥協することによって、幕府が考える抜本的な改革にまでは至らなかったことが解明された。フェートン号事件を踏まえた長崎警備の改変と各大家領警備の改変に時差がみられたことが解明された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

松尾晋一、大坂湾警備の展開、『大阪大学総合学術博物館叢書 3 城下町大坂』、78 - 80 頁、2008 年、査読有。

松尾晋一、ロシア船への警戒と長崎警備 文化三・四年のロシア問題の影響、『長崎県立大学国際情報学部研究紀要、第 9 号、103 - 113 頁、2008 年、査読有。

辺見一男、藤原直子・松尾晋一、3 次元 CG による長崎海防史跡復元の試み、『長崎県立大学国際情報学部研究紀要』、第 9 号、7 - 24 頁、2008 年、査読有。

〔学会発表〕(計 1 件)

松尾晋一、文化期における長崎警備の展開、九州史学会、2007 年

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松尾 晋一、長崎県立大学、国際情報学部、講師

研究者番号：40453237

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし